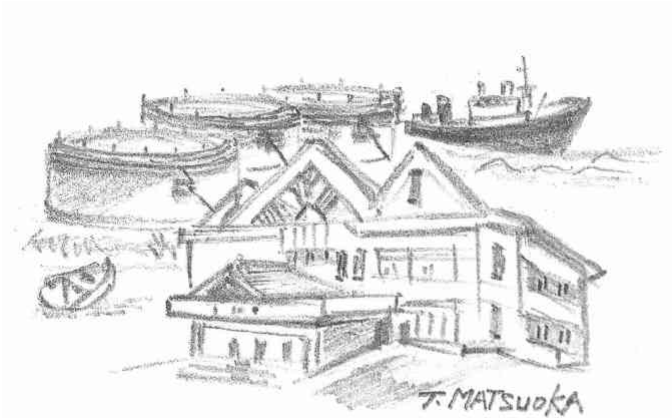


第一編 喜入町の概況



薩摩半島の南東部にあり、錦江湾沿いに細長い形をした喜入町。そこに生きる人々と自然の営みを、この編ではとらえます。

位置、面積、人口の推移、町内各地区の概況、地域活性化策などがつかめます。

さらには石油備蓄基地でつながる沖縄県与那城町よなしろとの姉妹都市盟約のいきさつ、交流の実態がわかります。

生見ぬみにあるリュウキュウコウガイ（マングローブ）は、国指定の特別天然記念物として有名です。

また、本町は昭和五十八年に「親切の町」を宣言して、人づくりに力を入れてきました。喜入の自然と調和した心豊かな人の住む町づくり、「ホットな人・海・山 ほっと新呼吸のまち」をめざしています。

第一章 自然

第一節 位置と面積



一 位置

喜入町は薩摩半島東部のほぼ中間に位置し、揖宿郡の最北部に位置している。北は鹿児島市、南は指宿市にそれぞれ接し、西は北部が川辺郡知覧町、南部が揖宿郡額娃町と境を接し、東は南北一六キロに及ぶ海岸線をもって鹿児島湾に臨み、遠く大隅半島と相対している。

二 面積

本町は、東西の長さ六・二キロ、南北の長さ一六・〇キロで、南北に細長く横たわり、総面積は六一・二三平方キロメートル（平成十四年十月、国土地理院）である。その地目別面積は次のとおりである。

資料平成十五年 統計きいれ

方位	極地名	東 経	北 緯
極 北	字坂口	一三〇度三五分	三一度一八分
極 東	字陣之元	一三〇度三〇分	三一度二〇分
極 西	字先蔵角	一三〇度三三分	三一度一七分
極 南	字街平境谷	一三〇度三一分	三一度二六分

平成15年度概要調書

H14.L1 現在 (税務課)

地目別	田	畑	宅地	山林	原野	その他
一面積	三九三ヘクタール	六八五	四六四	二、八五五	五七	一、六六九
	々	々	々	々	々	々

山林、原野、その他が七五パーセントを占め、耕地はわずかに一八パーセントに過ぎない。しかし、耕地面積に対する水田の割合は三七パーセントで揖宿郡内においては最も高く、県内の平均とほぼ同じぐらいである。古くから、良質の喜入米として声価が高く、指宿市や山川町など、他町村へ移出されていたこともうなずけるのである。

明治二十二年（一八八九）四月に町村制が施行され、喜入郷は喜入村となり、瀬々串・中名・前之浜・生見の四つの大字が置かれた。これに対し、行政区は瀬々串・中名・喜入・一倉・前之浜・生見の六つで、中名・前之浜の二つの大字には中名・喜入・一倉・前之浜の四つの行

政区がはいり、大字と地区名の違いから生活に不便、不都合を生じた。新しく大字に喜入と一倉を設けることで、これを解消することとし、昭和六十三年（一九八八）三月一日から実施され、これで大字と行政区（学校区を含む）が同じとなった。

行政区別の面積は次のとおりである。

- 瀬々串 七・三六平方キロメートル
- 中名 一〇・四八
- 喜入 一一・九三
- 一倉 八・三八
- 前之浜 一二・三六
- 生見 一〇・七二

第二節 地形・地質

一 地 形

本町は南北に細長く、西部は、標高五〇〇メートル内外の山塊で、薩摩半島を南北に走る南薩山地の一部である。

南薩山地は、薩摩半島の分水嶺であり、本町と知覧町および穎娃町との境界をなしているが、半島を東部寄りに走っているので、半島の西部では、傾斜がゆるやかで広い平地が開けている。しかし、東部の本町では、傾斜が急であり、台地が海岸に近く迫り平地に乏しく、道路も海岸線とぎりぎり平行しているところが多い。

西部山塊には、北部に烏帽子岳（五二二メートル）、大平岳（三九四メートル）、岩爪山（四〇六メートル）がそびえ、中部に、母ヶ岳（五一七メートル）、待集山（四四八メートル）、松津ヶ平（三八五メートル）、荒平山（四〇〇メートル）、種子尾山（四九七メートル）、南部に尾巡山（五七七メートル）、吉見山（五二四メートル）、殿ヶ峯（二三三メートル）、小平山（三四三メートル）などの山々がそびえている。

尾巡山一帯は、千貫平ともいい、なだらかな高原で、山頂の眺望は雄大絶佳、はやくから観光地としてハイキング客が多く、新鹿児島百景にも選ばれた。

昭和四十四年（一九六九）三月、穎娃町上別府から千貫平台地を経て池田に至る延長一四・一キロのスカイラインが開通し、さらに昭和五十二年（一九七七）、穎娃

町上別府から谷山に至る二九キロが延長され、高速自動車道にもつながり観光面と迂回路として期待されたが、百パーセント機能しているとはいえず、現在、中部に農免道路建設がなされている。

西方山塊に源を発する河川はいずれも長さが短く、流れが急で、河底が砂礫層であるため漏水する所が多い。

平時は水量に乏しいが、豪雨の時は急に増水し、激流岩を噛み、氾濫して、災害を起こすことが多い。

喜入地区を流れる八幡川（八、二〇〇メートル）が最も長く、その北方を流れる愛宕川は、昭和四十八年（一九七三）、人工（目石基地の埋め立て）によって河口が八幡川と一つになった。

瀬々串地区には、水無川、浜田川、波止川、駒返川が流れ、中名地区には、樋高川、前田川、清水川、竜毛川があるが、いずれも細流である。前之浜地区には、貝底川、鈴川が流れ、生見地区を流れる田貫川は、源を指宿市の山中に発し、井手川・八枝川、久津輪川はいったって細流である。

これらの河川は、山地を浸食して深い峡谷を造り、上流の河岸は、険しい崖をなしている所が多い。

西方山塊から多くの台地が東方に延びている。東原台地や有田原台地は、その尖端が海岸に迫り、垂直にそそり立ち、シラスの肌を露出している。

大太古山（鹿児島市平川町）や黒地蔵の台地は、堆積したシラスが風雨に浸食されて、基盤の岩石を露出している。これらの台地と台地の間には、大小の平地が開け、多くは水田として耕作され、また宅地となっている。

現在台地として残っている所は、大部分が畑地として利用されている。このようにして、台地と平地が交互に交錯し、また、河川上流付近には、迫が形成され波状形の地形を形成している。

海岸線は、ほとんど直線に近く、単調で、わずかに弧状に湾曲して一六キロに及んでいる。瀬々串の海岸は、岩浜でやや屈曲しているが、中名以南は、砂浜で極めて単調である。しかも、海底地形が遠浅で、かつ沖合が急激に深くなり、地盤が強固で土質が良好であることから、昭和四十二年（一九六七）、中名海岸に日本石油喜入基地として埋め立てられ五四基のタンク群が建設され、原油を運ぶ大小のタンカーの出入りする喜入港が出現した。



地形図

海岸線は、かつては、現在より東方海中に延びていたが、海水に浸食されて、後退したのと思われる。砂浜は漸次狭くなって、潮汀線（なぎさ）が次第に陸地に迫り、波浪による決壊の危険も生ずるようになり、人家のある所は年次的に護岸工事や離岸堤を設けて災害を防いでいる。

二 地 質

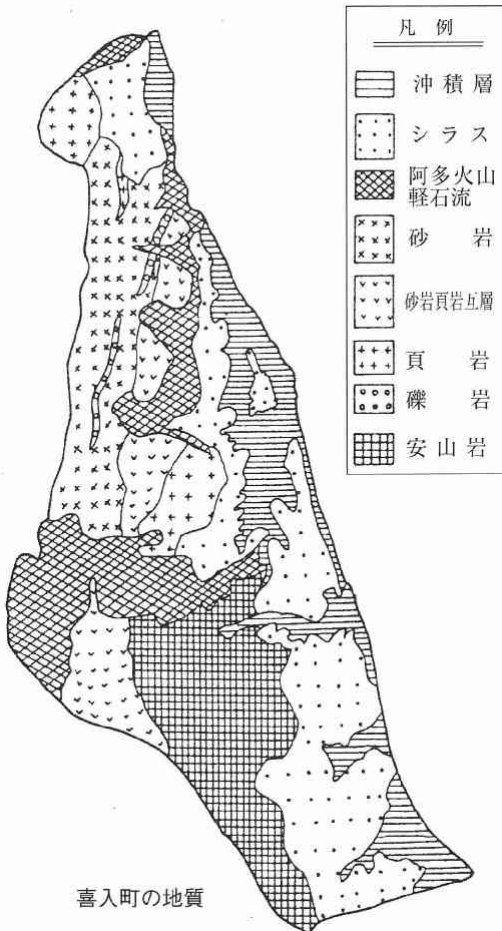
昭和三十五年（一九六〇）、工業技術院地質調査所調査員太田良平が、本町の地質を、約二週間にわたって調

査した結果、本町の地質が明らかにされた。

本町で最も古い岩石は、時代未詳層群に属する砂岩層頁岩層、砂岩頁岩互層および礫岩層で、地殻の基盤は、これら岩層の重層から成っている。

生見、前之浜の高台地に広がる第三紀の噴出物である安山岩や、弓指西方の山腹や、湊田東方に見られる同期の流紋岩も、本町の地殻の基盤を形成する岩石である。

第四紀更新期に、霧島火山脈が旺盛な火山活動を始め諸火山が多量の噴出物を噴出した。当時、鹿児島湾口には、薩摩、大隅両半島に跨る巨大な阿多火山があり、また、湾奥部には、始良火山があつた。この二つの火山はその火山活動によつておびただしい量の火山噴出物を噴出し、そのた



め生じた地下の空洞は、地殻の重みで陥没し、阿多カルデラ、始良カルデラができた。鹿児島湾は、この二つのカルデラを連ねた部分が、さらに落ち込み、これに海水が進入してできたとされている。

阿多火山によつて噴出された軽石流は、西方知覧町方面から本町に流入し、山地の谷間を埋め、中名付近では

これが海岸近くまで延びている。その後、始良火山の噴出したばく大な量の軽石が降下して、本町の山野を一樣に覆ったようである。山野に堆積されたばく大な量の軽石は、長年月の間に風雨に浸食されて山麓に流下し、再堆積して台地をつくった。これがシラス台地である。

現世に入つて陸地に隆起が起こり、台地は、河川によつて、浸食され、運搬された粘土、砂、礫などが下流に堆積して、沖積平地を形成した。

時代未詳層群

時代未詳中生層とも呼ばれ、南九州一帯に広く分布しているが、本町でも、これが地殻の基盤をなしている。

礫岩層、頁岩層、砂岩頁岩互層などの重畳からなり、ときには、砂岩層をはさんでいるものもある。

砂岩は細粒質で、新鮮なものは濃青色をしており、塊状で堅硬、個々の粒は判明しにくい。しかし風化作用に對して、抵抗力が強いので、急傾斜の山体をなして、そびえ立っている所が多い。

頁岩層は、主として黒色頁岩で、ときには砂岩をはさんでいる所もある。これは風化が容易で黄褐色になり、粘土状を呈しているが、まれに粘板岩と呼ぶべき岩層も

見受けられる。

砂岩頁岩互層は、二〇〜三〇センチ程度の砂岩と頁岩の互層からなり、樋高付近の海岸で見られるように、層理がよく発達している。

第三紀流紋岩

弓指西方の山腹に流紋岩の転石が分布している。露頭は見当たらないが、凝灰角礫岩を伴っているので、おそらく、地表に噴出したものと思われる。この溶岩は塊状で灰白色または灰褐色を呈しており、そのなかに長さ一・〇〜一・五ミリの長石、径〇・五〜〇・一ミリの石英、長さ〇・五ミリ以下の黒雲母が点在している。

淵田東方の溶岩は灰緑色を呈しており、そのなかに、長さ一・〇〜一・五ミリの長石が多く散在し、径一・〇ミリ以下の石英も点在しているが、黒雲母は認められない。

第三紀安山岩

種子尾山の山腹から、前之浜、生見の山腹一帯に広くひろがっており、流紋岩より新しく、おそらく第三紀末ごろの噴出物と思われる。溶岩は堅硬で新鮮な感があり、青黒色で、なかに長さ一・八ミリ以下の斜長石、長さ

一・五ミリ以下の輝石の両斑晶が密に存在している。
阿多火山軽石流

阿多火山の噴出した多量の軽石流が、知覧町^{てんみ}手蓑の谷間に南西から進入した後、峠にのし上がり、さらに峠を越えて鹿児島湾側に流れ込んだものと考えられる。手蓑峠に厚さ数メートルの溶結凝灰岩が露出しており、手蓑峠から樋高に至る峠にも同質のものが露出している。

これらの阿多火山軽石流は、そのほとんどが溶結しており、基盤に接する部分にわずかに非溶結の状態を認めることができる。樋高付近の海岸で国道の切取部を観察すると、時代未詳層群の上に厚さ三〇〜一五〇センチのロームがのり、その上に阿多火山軽石流があり、その基底の八〇〜一二〇センチの部分は弱溶結して風化が進んでおり褐色を呈している。また、基盤に直接に接触している厚さ一〇〜三〇センチはあまり顕著ではないが、明らかに軽石、凝灰角礫岩と呼ぶべき岩相を認めることができる。手蓑峠付近でも同様のことを観察することができる。

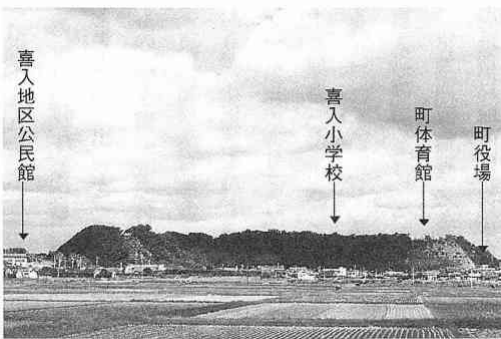
降下軽石流

広く山野を一様に覆った降下軽石は、長年月の間に、

そのほとんどすべてが山麓に洗い流され、二次堆積軽石層となり、いわゆる「シラス」台地をつくったのである。山麓部や平坦地^{へいたん}に堆積した降下軽石層は、二次堆積軽石層の下層に見られることはいうまでもないが、層の厚さは一般に五〇センチ内外、軽石の大きさは「ウズラ豆」大のことが多い。

二次堆積軽石流（シラス層）

シラス台地は、山麓に幼年期の地形を示してひろがつ



浸食から取り残された高野原台地

ており、その分布は、標高一〇〇メートル以下で、基盤の起伏を一樣に覆い、鹿児島湾に向かつて、ゆるやかに傾斜している。東原や有田原は直ちに海に接しているが、基盤は露出していない。

有田原、東原、

高野原台地のシラス層が厚いのは、背後の分水嶺が付近よりはるかに西方に入り込んで、弓指、小田代などの後方地帯から供給された物質が、多かつたためと思われる。

高野原台地は、浸食から取り残された孤立したシラス台地である。町内の台地は大部分が、シラスであるが、種々の粒度の軽石が、その破砕片とともに堆積されたもので、ほとんど垂直の崖を連ねて露出している。岩体は崩れやすく、長年月の間に浸食されて、いたるところに深い谷間を刻んで、いわゆる「サコ」（迫）を形成している。

沖積層

シラス台地にかこまれた平坦地の沖積層で、その大部分は水田として耕作されている。かつては、遠浅の海であつたと考えられるが、隆起したり、また清水川、浜田川、八幡川、愛宕川、貝底川、鈴川、田貫川などの多くの河川によって運ばれた粘土や砂礫が堆積して、現在みるような沖積平坦地を形成したものである。

新規ローム層

沖積層を除く全地域を覆って、二次堆積軽石層の上に不整形に載って広く分布している。平坦な地形のところ

では、とくに厚く堆積している。

これらは、火山砂、軽石、スコリヤ、火山岩の破片などの火山噴出物が、風によって運ばれて堆積してできたものである。

東原シラス台地の上では、約一・二メートル堆積しており、小田代では、三層に分かれ、厚さ五〇〜一〇〇センチぐらいありそれぞれ不整形に重なり、さらに、その上に厚さ三〇〜五〇センチの黒色火山灰層が載っている。

喜入砂礫層

宮地西方台地に分布している。おそらく新二期ローム層堆積以前の扇状地堆積と思われる。砂礫層は、二次堆積軽石層の削剥面さくはくの上に載り、その厚さは五〇〜一五〇センチであり、人間の頭大以下の各種亜角礫からなっている。これは、背後の山地を構成している時代未詳層群の岩石が、洗い流されて堆積されたものである。

ほかに、浜田集落北側の海抜数メートルのところに、時代未詳層群の上に、拳大こぶ以下のよく円摩された礫層がみられる。分布は狭いが、海岸の堆積物と思われる。

第1表 平成13年 月別 日最高・最低・平均気温調査結果表（午前9時）

気温	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
日最高気温	15.6	18.8	20.4	21.7	23.4	29.7	32.1	32.2	30.8	25.4	21.2	21.2
日最低気温	0.9	5.2	4.4	10.6	18.1	19.6	24.1	24.3	21.3	19.2	11.3	6.7
日平均気温	8.5	10.6	11.9	16.2	20.3	24.2	28.2	28.3	25.1	21.5	15.8	12.7

第2表 年別気温調査結果表（喜入町）

区分 年度	9時気温			最高気温	最低気温	年平均気温
	最高	最低	平均			
昭和49年	33.0	2.0	18.2	36.0	-3.2	18.0
〃 53年	31.0	-1.0	18.8	35.6	-1.0	18.2
平成2年	32.6 ^{8月}	-0.4 ^{1月}	17.1	35.4	-1.1	17.2
〃 7年	31.0 ^{8月}	-2.0 ^{12月}	16.0	34.0	-5.0	15.8
〃 13年	32.2 ^{8月}	0.9 ^{1月}	19.1	36.0	-2.0	18.6

第三節 気候・自然災害

昭和四十二年（一九六七）十月から、本町に農業気象観測所が設けられ観測が行われていたが、昭和五十一年（一九七六）十月からは町消防署が観測を行っている。

気候は高温多湿で、年平均気温は摂氏一六〜一八度内外で温和な気象に恵まれ四季を通じて植物が繁茂し、温暖な気候である。

近年の観測結果をみると、最高気温は昭和五十一年（一九七六）の三六・八度、最低気温は平成七年（一九九五）の零下五・〇度の記録がある。

降雨量は年平均二、八〇〇ミリ前後であるが、六月に最も多く、夏期にはしばしば台風が襲来し、ときには非常に豪雨を伴うことがあって、農作物や人家、道路、交通機関に大きな被害を与えることもある。

しかし梅雨が明けると、晴天が続き、干害に見舞われることが多い。特に昭和九年（一九三四）七月から八月にかけて大干ばつは、安政以来の大干ばつといわれ、夏作物に大きな被害を与えた。

第3表 年別降水量比較（喜入町）

（単位：mm）

年度	月最大雨量		月最少雨量		最大日雨量		年間降水量
	月	総量	月	総量	月	総量	
平成2年	6月	451.5	12月	47.0	7月1日	226.0	3,001.0
〃 7年	4月	502.0	12月	19.5	4月22日	190.5	2,390.0
〃 12年	6月	763.0	2月	80.5	8月17日	223.5	2,819.0

第4表 月別降水最大日量（喜入町）

（単位：mm）

年	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平成2年		50.0	164.5	91.5	102.0	141.5	151.0	226.0	44.5	194.0	126.5	43.0	15.0
〃 7年		18.5	42.5	40.5	190.5	69.0	165.0	101.5	98.0	62.0	33.0	26.5	6.5
〃 12年		39.0	41.0	34.0	41.5	33.0	123.0	180.0	223.5	85.0	48.5	29.0	32.0

また、最近世界的に異常気象が発生している。ところによつては、冷夏・猛暑・干ばつ・長雨などの現象が見られる。

これが単にエルニーニョ現象か、それとも環境汚染（二酸化炭素などの大量排出）によるものか、今後の研究によつて解決の方策を真剣に考え実行する必要がある。

喜入町に被害をもたらした主な自然災害（古記録による）

西暦	年号	災害記録
一六九四	元禄七年	五月十八日、大風あり、堤防の決壊多し
一七一〇	正徳元年	七月二十二日、大暴風雨あり、喜入役所倒壊、倒壊家屋一〇九軒、米一一八石（二一・二トン）余、雑穀四五〇石（八一トン）余の損害、一四反帆船（神戸もの）破船、倒杉一五本、倒松一九七本、死馬二頭
一七二六	享保元年	六月十八日、大洪水あり、農作物に被害多し
一七二七	享保二年	七月二十一日から二十三日まで暴風雨、田・畠の被害多し、海岸線の破損多く、同年九月から海岸線の普請が始まり、加勢の夫婦一、〇一〇人、指宿六九〇人、山川三〇〇人、喜入二、一八八人、喜入役所二、一八八人
一七二八	享保三年	大凶年であつて拝借米をなす者多し。一人につき米二升（三・六リットル）として生見九三軒三九四人、前之浜坂上二三軒八三人、前之浜中七二軒二八二人、喜入町八軒三九人、米一升五合（二・七リットル）として瀬々串二八軒一二〇人、中名二軒九人、前之浜三軒一八人、内蘆三軒一〇人
一七三〇	享保五年	六月三日、大地震あり、愛宕神社脇が崩壊し、川を埋め、付近の水田に被害多し
一七五二	宝暦二年	凶年のため拝借米の願出多し、瀬々串一五六人、中名三二八人、前之浜二九人、生見二七五人、町二三人（一人二升宛）
一七八二	天明二年	八月、大風、洪水あり
一八三二	天明三年	二年から六年まで、毎年風水害あり、凶年となる
一八六六	天保三年	六月干ばつあり、天保六年までつづく
一八九一	慶応二年	五月二十五日、大洪水あり、八幡川堤防決壊し、水田・人家の埋没多し
一八九九	明治四年	九月十三日、暴風雨強く、海岸線の破損多し
一九〇一	明治四年	八月十四日、大暴風雨となり、人畜・農作物の被害甚大
一九一四	大正三年	九月二十一日、大洪水となり、被害甚大、十月二十九日被害視察のため日根野侍従が来町 一月十二日、桜島大噴火によって降灰多く農作物の被害多し、家屋倒壊一棟（瀬々串）、漁船一隻、松材一本、杉材二本、馬の死体が海岸に漂着

一九三〇	昭和	五年	七月十八日、台風来襲し農作物に被害多し
一九三四	"	九年	二か月余の干天つづきで、夏作は枯死し被害多し
一九四二	"	一七年	八月二十七日、暴風雨農作物の被害多し
一九四五	"	二〇年	九月十七日、枕崎台風、家屋・樹木の倒壊、倒木多く、農作物などの被害甚大
一九四九	"	二四年	六月二十八日、デラ台風、町内各所崩壊、喜入小学校長住宅倒壊二名死亡
一九五一	"	二六年	十月十四日、ルース台風、風雨強く海岸線の決壊多し、農作物などの被害甚大
一九六七	"	四二年	九月二十四日、潮風を吹き上げ、作物に甚大な塩害を及ぼす
一九六九	"	四四年	六月三十日、集中豪雨（公共土木・農林業用施設・農作物に多大の被害）
一九八三	"	五八年	六月二十一日、土砂くずれで列車が埋まる（野元トンネル）
一九八五	"	六〇年	八月三十一日、台風13号、大暴風となり住家・農作物等に被害多し
一九八九	平成	元年	七月二十七日、台風11号、高潮等による床下浸水、農作物、河川・海岸の決壊等の被害多し
一九九三	"	五年	九月三日、台風13号、大暴風雨となり住家・農作物等に被害多し
一九九六	"	八年	七月一日、喜入で竜巻が発生し、二一戸の住宅、ビニルハウス七棟に被害
一九九七	"	九年	九月十六日、台風19号、国道が決壊し、前之浜く鈴間の交通遮断

第四節 動植物

本町における動植物の生息状況についての詳細な調査資料はないが、南薩地域の状態について述べる。

一 植 物

本町のある南薩地域は、鹿児島湾と東シナ海に囲まれ、

海岸に面した地域は暖流の影響で冬でも霜を見ない場所が多い。そのため、メヒルギ、ギョボクなど北限種となつているものや、キハギ、ヒゴスミレなど南限種も多く見られる。

本町は西部に高い山が連なり、大部分が畑とスギ・ヒノキの人工林で占められ、自然林は烏帽子岳^{えぼし}神社周辺や知覧町と頼娃町の境に点在しているにすぎない。生見海岸にはメヒルギの自生地があり、また、明治四十四年

(一九一一)に喜入小学校の裏山でキイレツチトリモチが初めて発見されている。

クロマツ、スギ、ヒノキ、モウソウチク、ハマヒサカキ、ヤブニツケイ、スダジイ、アカガシ、タブノキ、サザンカ、ホソバタブ、シキミ、イズセンリヨウ、イヌノキ、リンボク、ハクサンボク、サカキ、オンツツジなどや、アミシダ、オトコシダ、サツマカナオイなどの分布の少ない植物も見られる。

二 動物

1 哺乳類

イノシシ、タヌキ、ノウサギ、テン、イタチ、アナグマ、ムササビ、モグラ、キクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、ドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミなどが一般的に見られる。

2 鳥類

(留鳥)カイツブリ、ダイサギ、コサギ、チュウサギ、クロサギ、ミサゴ、トビ、コジュケイ、キジ、コシジロヤマドリ、キジバト、アオバト、ヤマセミ、カワセミ、キツツキ、コゲラ、ヒバリ、キセキレイ、セグロ

セキレイ、ヒヨドリ、モズ、カワガラス、ミソサザイ、ウグイス、シジュウカラ、ヤマガラ、メジロ、ホロジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、カケスなど
(渡り鳥)マガモ、ヒドリガモ、ツバメ、ハクセキレイ、コマドリなど

3 両生類 爬虫類

南薩地区だけに限って生息するような特殊な種はいない。

ニホンヒキガエル、アマガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、トノサマガエル、ウジガエル、ツチガエル、ヌマガエル、シユレーゲルアオガエル、カジカガエル、アカウミガメ、ニホンヤモリ、ニホンカナヘビ、ニホントカゲ、アオダイショウ、シマヘビ、ニホンマムシ、ヤマカカシ

4 昆虫類

モンキアゲハ、クロアゲハ、アオスジアゲハ、モンシロチョウ、モンキチョウ、ムラサキツバメ、ベニシジミ、アサギマダラ、キタテハ、ルリタテハ、ウラナミジャノメ、ヒメジャノメ、イチモンジセセリ、キマダラセセリ、カブトムシ、カナブン、ヒラタクワガタ、

ノコギリクワガタ、ノコギリカミキリ、ゴマダラカミキリ、ニジュウヤホシテントウ、カメノコテントウ、ハンミョウ、マイマイカブリ、クロシデムシ、ヤマトタムシ、サビコキリ、ウリハムシ、トノサマバツタ、ショウリヨウバツタ、オンブバツタ、ケラ、エンマコオロギ、マツムシ、クツワムシ、サツマゴキブリ、オニヤンマ、ギンヤンマ、シオヤトンボ、オオシロカラトンボ、ショウジョウトンボ、ニイニイゼミ、クマゼミ、アブラゼミ、ツクツクボウシ、ツマグロヨコバイ、アオクサカメムシ、ヒメホシカメムシ、スズメバチ、キアシナガバチ、クマバチ、シオヤアブ、ベッコウガガンボ、アカイエカなど

※動植物の資料は「喜入町田園環境整備マスタープラン報告書」（平成十四年）から抜粋した。

5 海辺の生き物

バイ、アマオブネガイ、マガキガイ、バカガイ、ハツユキダカラガイ、ハナマルユキダカラガイ、コシダカガンガラ、ニシキウスガイ、オオヘビガイ、アサリ、オハグログキ、ヒバリガイモドキ、ヨメガカサガイ、ヒザラガイ、アコヤガイ、ナミマガシワ、イソアワモ

チ、ムラサキウニ、ニセクロナマコ、マダコ

※資料 親子で楽しむ「きいれのしぜん」（喜入町教材開発委員会）

第二章 人口・集落

第一節 人口

藩制時代には、宗門手札改めによって人口調査がなされておき、現在の戸籍の用をなしていたが、延享三年（一七四〇）四月に実施した給黎郷さいれいごうの人口調査によれば、五、一四一人となっている。

明治四年（一八七二）三月、戸籍法が施行され、戸籍人口をもって当該地域内の人口としたが、大正の初期ごろから転出入がしだいに活発となり、戸籍人口と現住人口との差が開くようになった。そこで、現住人口も調査するようになり、大正九年（一九二〇）から全国いっせいに、国勢調査が実施されるようになった。

喜入町における大正九年以前の記録としては、延享三年の人口調査のほかに、つぎのようなものが残されている。

○弘化元年（一八四四）喜入郷戸数調

総戸数 一、二三五軒

内 三三九軒 家来

三一軒 中名・前之浜

五八五軒 瀬々串・宮坂・生見

○明治八年（一八七五）十二月調

総人口 八、四八八人

内 男四、二二七人

女四、二六一人

内 士族人数二、〇三二人

戸数 一、八三五戸

内 士族戸数四四一戸

○明治二九年（一八九六）十二月調

総戸数 一、九二二戸

人口 一〇、八五二人

内 男五、三一人

女五、五四一人

○大正六年（一九一七）十二月調

総戸数 二、二七五戸

人口 一四、三三八人

内 男六、九三二人

女七、三九七人

右の記録からみれば、延享三年から明治八年にいたる二・九年間の人口増は三、三四七人となり、年平均二五・九人である。また、明治八年から大正六年にいたる五二年間では五、八四〇人の増であり、一一・二・三人の年間平均増となっている。

以上のことから考察すれば、喜入の人口は、明治以降に急速に増加したことがうかがわれる。

藩制時代における人口増の低いことには、いろいろな要因が挙げられるが、死亡率が高く、かつ生活の貧困から「間引^{まびき}」と称する人口抑制の方法がとられていたことが大きな原因であろう。明治になって「間引」が禁止され、農業生産も向上し、住民の生活もしだいに豊かになり、人口の増加も急速にのびたものとみるべきであろう。

大正九年（一九二〇）から平成十二年（二〇〇〇）までの世帯数および人口の変遷をみると、第1表のとおりである。これによると、昭和二十四年が最も多く、その後漸次減少^{ぜんじ}の傾向を示している。世帯数は、多少の起伏を示しながら減少しているが、その落差はきん少である。しかし人口は大きな落差をもつて減少し、昭和四十五年

（一九七〇）にはついに大正九年（一九二〇）以下になっている。

昭和二十四年（一九四九）が最高人口を示しているのは、終戦直後の復員者、引揚者が非常に多かったこと、およびその結果による出生率が高かったことによるものである。

その後の減少の傾向は、わが国全体に見られる人口の都市集中、農村過疎現象の現れで、終戦後の混乱の沈静とともに、若年層の町民が、農業より所得の高い職を求めて都市に転出したためである。

本町の人口動態は、第2表のとおりである。死亡数には大きな変化はみられないが、出生率は著しい減少を示している。出生数の減少は、総人口の減少が主因をなしているが、少なく産んで養育の労から免れ、また、生活を豊かにするという思想もその原因となっている。

社会的人口動態をみると、転入より転出が多いが、昭和四十年（一九六五）ごろから転出は減少の傾向を示している。

第3表は、年齢階層別人口を示したものである。最近における年齢階層別の人口の動向をみると、若年人口は

第二章 人口・集落

第1表 年次別人口・世帯数（国勢調査に基づく）

年次	区分 調査区分	世帯数	人口			人口密度 (1 km ² 当)
			総数	男	女	
大正9年	国勢調査	2,827	12,020	5,666	6,354	199.7
〃 14	〃	2,822	12,423	5,946	6,477	
昭和5年	〃	2,856	12,935	6,173	6,762	214.9
〃 10	〃	2,886	13,112	6,232	6,880	217.8
〃 15	〃	2,684	12,847	6,050	6,797	213.4
〃 22	臨時国勢調査	3,674	17,525	8,246	9,279	291.1
〃 24	推計	3,553	17,851	8,426	9,425	
〃 25	国勢調査	3,648	17,541	8,246	9,295	291.4
〃 30	〃	3,542	16,245	7,719	8,526	269.9
〃 35	〃	3,678	14,562	6,571	7,991	238.6
〃 40	〃	3,527	12,882	5,909	6,973	214.0
〃 45	〃	3,555	11,708	5,292	6,416	194.1
〃 50	〃	3,881	11,764	5,363	6,401	195.4
〃 55	〃	4,116	12,354	5,741	6,613	198.7
〃 60	〃	4,326	12,574	5,865	6,709	202.3
平成2年	〃	4,400	12,518	5,858	6,660	203.8
〃 7	〃	4,664	12,772	5,911	6,861	207.9
〃 12	〃	4,828	12,802	5,939	6,863	209.4

減少し、半面高齢人口が増加しつつあり、また、労働人

口も減少している。

第2表 人口動態（総人口は住民基本台帳による）

年次	自然的動態			社会的動態			A + B	総人口
	出生	死亡	増減(A)	転入	転出	増減(B)		
昭和11年	603	304	299	146	80	66	365	13,135
〃 25	539	192	347	136	151	△15	332	17,541
〃 30	396	137	259	922	1,137	△215	△44	16,245
〃 40	165	142	23	780	986	△206	△183	13,334
〃 50	150	152	△2	857	850	7	5	12,099
平成2年	86	125	△39	697	630	67	28	12,925
〃 7	111	163	△52	716	570	146	94	13,319
〃 12	74	141	△67	553	591	△38	△105	13,193

第3表 年齢階層別人口

年度 年齢階層別	昭和25年			昭和53年			平成13年(平成14年4月末)		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
0～4歳	967	919	1,886	294	321	615	241	231	472
5～9	910	966	1,876	405	405	810	313	330	643
10～14	1,119	1,164	2,283	461	407	868	418	373	791
15～19	1,061	902	1,963	536	507	1,043	418	423	841
20～24	631	696	1,327	352	398	750	315	308	623
25～29	473	712	1,185	411	398	809	306	325	631
30～34	420	538	958	400	353	753	279	311	590
35～39	416	575	991	301	297	598	297	326	623
40～44	400	535	935	338	355	693	414	474	888
45～49	397	444	841	360	471	831	529	509	1,038
50～54	352	411	763	418	535	953	560	540	1,100
55～59	287	326	613	328	492	820	425	371	796
60～64	246	310	556	339	472	811	353	437	790
65～69	182	286	468	303	401	704	373	464	837
70～74	180	237	417	247	333	580	371	511	882
75～79	126	165	291	168	260	428	261	475	736
80～84	58	72	130	94	151	245	173	319	492
85～89	21	34	55	34	76	110	84	201	285
90歳以上	0	7	7	8	29	37	39	119	158

90～94歳	28	98	126
95～99歳	10	20	30
100歳	0	0	0
101歳以上	1	1	2

第二節 集 落

藩政時代の郷村の集落組織として、在(農村)では門割制度かどわりが設けられ、門かどは在における百姓の小集団であった。したがって藩政時代における在の部落(集落)組織の単位は門であった。

喜入郷の藩政末期における門数は七〇門であり、そのほかに麓かふもとが七町に分かれている。

明治の地租改正によって、この門割制度は廃止されたが、その後明治十六年(一八八三)には部落(集落)の自治組織として人民組合が設けられた。

明治二十二年(一八八九)の自治体市町村制の施行によって、行政上の必要から、末端の自治組織として門を中心とした部落(集落)組織ができた。

当時の村は、現在の大字を単位として、瀬々串村、中名村、前之浜村、生見村であったので、給黎郷きいれは喜入村と改称し、旧来の村はそれぞれ大字に改められた。

集落の名称については、

(1) 門や屋敷名を集落名としたもの

浜田・野元・仮屋崎・湊田・弓指・生見・米倉・古殿・森満・帖地・田貫など

(2) 古くから呼称されていたもの

旧市・麓・宮地・旧麓・町・大丸など

(3) 一、三の門を一括したもの

鈴東・鈴・中菌の門を一括して鈴

(4) 門名などを使わず方位によって呼称されているもの

瀬々串や中名の上・中・下など

当初は、このように門割制の旧習を残していたが、その主な理由は、地租改正の際、部一山ぶいちやま、門附山かじつきやまなどの共有山林はこれを管理していた門の共有地として交付され、これらの維持管理のために従来の門の組織を踏襲する必要があったからである。

当初門割制の旧習を残していた集落組織も、住居の移転、新築家屋の増加、道路の新設改修、鉄道の開通などによって集落の分断、集落共有物件の売却などによって旧制度の必要度がなくなるとともに、行政上にも問題があるようになってきたので、集落の区域を河川、道路などを境界として大部分の集落が改編されていった。

昭和二十年(一九四五)までは三〇の集落に分かれて

いたが、終戦後吉見山麓に開拓入植し、新たに吉見集落が形成され三一集落となった。

その後、古殿・久保園・川畑集落については昭和五十二年（一九七八）までに度々の合併・分割の経緯があり、その都度集落名が改称された。昭和五十七年（一九八二）には、古久と古久川が合併し、古久川集落となった。

昭和五十二年（一九七七）四月、麓集落を麓東・麓西に分別し、三二集落となったが、昭和六十三年（一九八八）四月には、瀬々串地区に星和集落ができ、町内三三の集落となった。

平成十四年（二〇〇二）三月末日、現在の末端組織としての集落は第1表のとおり三三の自治公民館があり、

第1表

地区/集落	自治公民館
瀬々串	上、中、下、浜田、星和
中名	上、中、下
喜入	旧市、麓東、麓西、宮地、湖田、旧麓、仮屋崎、野元、領南、町、大丸
一倉	弓指、一倉、小田代
前之浜	川上、川中、川下、鈴
生見	生見、森満、帖地、米倉、田貫、古久川、吉見

この自治公民館を単位とし、瀬々串、中名、喜入、一倉、前之浜、生見の六地区に分かれている。また、各地区ごと

に公民館が設置されている。自治公民館は、社会教育法第四十二条にいう公民館類似施設であり、住民生活の共同の仕組みになつており、地域づくりを進める学習活動の拠点である。

また、集落長が、行政連絡員としての文書の配布、税金・水道料金などの集金や、それぞれの集落の産業、教育、衛生、福祉業務などの活動推進にも携わっている。地区別の人口推移は、第2表に示すとおりである。

第2表 地区別人口動態

地区	昭和35年			昭和55年			平成13年		
	世帯数	男	女	世帯数	男	女	世帯数	男	女
瀬々串	611	1,335	1,433	700	1,091	1,189	1,054	1,318	1,499
中名	502	1,077	1,261	711	1,149	1,265	846	1,098	1,225
喜入	801	1,462	1,809	1,156	1,678	1,923	1,652	2,107	2,366
一倉	184	368	433	179	255	302	210	262	300
前之浜	681	1,311	1,586	639	880	1,069	696	730	911
生見	670	1,226	1,491	679	848	1,001	596	635	742

第三章 特色ある喜入

第二節 親切運動推進の町

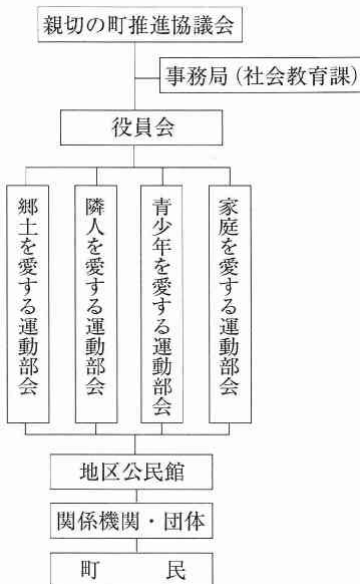
喜入町においては昭和五十八年（一九八三）九月二十三日、県下で初めて親切の町推進運動を宣言し大会を実施した。

一 主旨について

社会の急激な進展は、われわれ人間共同体の構造にいちじるしい変化を招き、こころの尊さより物の尊さが優位となり、人間らしい生き方がすたれつつあることは、まことに憂慮にたえない今日の世相であります。

「人はひとりでは生きられず、また愛なくしては生きられない。」これは人間生活のまことの道であり、その存在なくしては生存不可能といえます。

ここにおいて、今、私たち喜入町民は総力を挙げ、



二 親切の町推進協議会組織

仲よく相携えて、人間本来の姿を願い求め、温かくうるおいのある心をとりもどし、人情に満ちたぬくもりの通い合う、ふるさとづくりを念じようとするものであります。

すなわち、私たちは、隣人との出会いを大切に、支え合い、連帯し、温かく生かし合う人間関係をつくりだすため、人間最高の美徳である愛と親切の心を求め、もって喜入の地に香り高きこころの花を咲かせようとするものであります。

三 推進運動事業（平成十三年度）

月 日	事 業 名	説 明
四月二二日 五月二五日 五月二六日 五月 六月二二日 六月一〇日 七月一〇日 七月～九月 一〇月 一日 一〇月三〇日 二月二七日 二月～四月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人権の花「ひまわり」の種 ・ 隣人、家庭を愛する運動部会 ・ 青少年・郷土を愛する運動部会 ・ 第十九回親切運動作品募集 ・ 親切の町推進協議会総会ならびに生涯学習推進会議 ・ チラシ配布と目標設定運動推進 ・ 親切運動作文、県への応募 ・ かもめーる俳句 ・ 親切運動アンケート調査 ・ 第二十回親切運動作品集発行 ・ 親切の町総合部会 ・ 第五回サンキューレタックスの募集、表彰、作品集発行 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全戸、小・中学校に配布 ・ 前年度の反省と平成十三年度の事業計画 ・ 作文・標語・ポスター 児童、生徒、一般（回覧板） ・ 四運動部会の報告、十二年度の事業報告と決算 ・ 十三年度の事業計画と予算案について ・ チラシに欄を設け、三六の子ども会にも呼びかけ ・ 応募数九五、特別賞、優秀賞、入選、佳作、実行賞など四八点入賞 ・ 募集、審査、表彰 一、〇四七投句 ・ 町民七〇〇名にアンケート ・ 関係機関、関係者への配布・町文化祭に作品展示↓地区公民館に標語・ポスター掲示 ・ 本年度の反省と次年度の課題 ・ 一、二〇六通応募 町内の小学生三八八通 ・ 四月六日 表彰式、六月 作品集発行

※平成十五年度は、二十周年記念事業を予定している。

親切運動に関する作文、標語、ポスターの募集は、小・中・高生・一般を対象に、昭和五十八年（一九八三）の親切の町宣言の年から実施しているが、「かもめぐる」「サンキューレタックス」の募集は、喜入町郵政町づくり協議会が主催となり、喜入町社会福祉協議会、喜入ライオンズクラブなどの後援により、「かもめぐる」は平



親切の町

四 作品募集について

成八年（一九九六）七月から、「サンキューレタックス」は平成十年（一九九八）三月から実施している。それぞれ県内に呼びかけ、入賞者には次のような授賞をしている。

「サンキューレタックス」

最優秀賞 1 ハウステンボス長崎の旅、二泊三日、

ペア一組

特別賞 4 賞状と楯たて

優秀賞 10 賞状と記念切手帳

佳作 60 八幡温泉保養館入浴回数券

「かもめぐる」

最優秀賞 1 東京デイズニールンドの旅

特別賞 3 賞状と楯

優秀賞 5 ふるさと小包賞

佳作 20 「かんぽの宿・指宿」の入浴券食事券

また、人権教育と併せて人権の花「ひまわり」の種子を平成十二年（二〇〇〇）四月から町内全戸、小・中学校へ配布し、夏季になると「ひまわり」の花があちこちで見られるように普及してきた。

第二節 姉妹都市盟約

昭和六十三年（一九八八）八月六日、喜入町は本町と同じく石油基地を有する沖繩県よなしろ与那城町との間で、教育・文化・経済・観光などの交流により相互の理解と親善を深め、両町民の福祉増進と町勢発展をはかることを目的として姉妹都市盟約を締結した。

事業を円滑に推進するため、喜入町姉妹都市事業推進協議会を設置し、青少年・団体・役場職員・職員人事交流などが現在実施されている。

一 姉妹都市事業推進協議会員名簿

（平成十五年）

職	名	氏名
喜入町議会議長（会長）	増永力夫	増永 力夫
喜入町公民館連絡協議会長（副会長）	前 蘭吉彦	前 蘭 吉彦
喜入町地域女性団体連絡協議会長	都 筑綾子	都 筑 綾子
喜入町商工会長	湖 田 攻	湖 田 攻
いぶすき農業協同組合喜入地区理事	浜崎義光	浜崎 義光
喜入町漁業協同組合長	坂元國茂	坂元 國茂

いぶすき森林組合理事

喜入町生活研究グループ連絡協議会長	砂本虎雄
喜入町子ども会育成連絡協議会長	志々目道子
喜入町社会福祉協議会長（監事）	宮原五三
喜入町校長会長（監事）	北 重雄
新日本石油基地(株)総務部長	秋武達朗
新日本石油マリンサービス(株)総務部長	湖脇哲朗
喜入町青年会連絡協議会長	納 泰男
喜入町校長	中高剛
喜入町教育長	日高保
喜入町教育長	内 蘭哲郎

二 姉妹都市交流

交流開催日	行 事・交 流 先
昭和六三年 八月六日	姉妹都市盟約調印式・祝賀会 青少年交流（二三名） （与那城村）
平成 元年 一月六日	盟約祝賀会 （喜入町）
平成 元年 八月五日	団体交流（農生改婦人会） 青少年の船 （与那城村）
平成一〇年三月	与那城町青少年 十周年記念式典・交流会 （喜入町）
八月	夏まつりでエイサー披露 （喜入町）
八月～九月	人事交流 国吉康成 （喜入町）
八月	十周年記念式典・交流会 （与那城町）



エイサー踊り
(喜入町夏祭りに出演した沖縄与那城町)

平成一一年 八月～九月	夏まつりで喜入太鼓披露 人事交流 前蘭秀徳	(与那城町)
平成一二年 七月	青少年の船 (三八名) 人事交流 宮城為治	(与那城町)
平成一二年 八月	青少年交流 (三五名) 人事交流 美里直樹	(喜入町)
平成一二年 八月～一〇月	青少年交流 (三五名) 人事交流 前畑 明	(与那城町)

平成一三年 七月	青少年の船 (三八名) 人事交流 蔵根 伸	(与那城町)
平成一四年 八月	青少年交流 (三四名) 人事交流 田川哲朗	(与那城町)
平成一五年 七月	青少年の船 (四〇名) 人事交流 新屋敷知子	(与那城町)
平成一五年 八月～一〇月	青少年交流 (四〇名) 人事交流 有村大介	(与那城町)
	青少年交流 前原康子	(与那城町)

平成十五年度までの交流人数計 喜入町 六六五名
与那城町四二五名 合計 一、〇九〇名

第三節 喜入会

一 関西鹿児島県喜入会

兵庫県尼崎市は鹿児島県の町かと言われるほど同県人が多く生活している。これは昭和三十年ごろから都会で働きたい、口減らしで都会へ、親孝行のためになど、さ

さまざまな理由で職を求めて居住したからである。これは、本県に限らず全国的な傾向であった。

当時はレジャー施設も少なかったため地域や職域県人会が次々発足し、いろいろな催しが行われるようになった。故郷を後にした若者は、深い愛郷心からわずかな余暇を利用しては親しい友と再会し励まし合った。

昭和四十二年（一九六七）の春、第一回の阪神地区鹿児島県喜入会は武庫川河川敷で約三〇名が手弁当で寄り集まり、焼酎を酌み交わし故郷を懐かしく語り合う交流から発足した。以後毎年総会兼親睦会を開催した。

○ 関西鹿児島県喜入会の主な歩み

昭和四十二年（一九六七）、阪神地区鹿児島県喜入会発足。

昭和四十五年（一九七〇）七月

尼崎市立産業郷土会館（俗称、県人会館）完成。

開館記念祭で「前之浜チヨイのチヨイ踊り」を披露。

昭和四十六年度（一九七一）、総会（郷土会館大広間に変更）。

昭和四十八年（一九七三）九月

尼崎市政記念市民まつりで「前之浜チヨイのチヨイ

踊り」を披露。

昭和五十三年度（一九七八）、出席者増加で総会会場を大庄地区会館に変更。

会の名称を「関西鹿児島県喜入会」に変更。

年間行事も充実多彩化し、一泊バス旅行、花見を兼

ねた運動競技会、秋の総会などを実施。

昭和六十二年度（一九八七）、総会

発足二十周年記念として「喜入太鼓」一行を迎える。

平成七年（一九九五）

一月十七日、阪神淡路大震災のため春の行事は中止

し、秋の総会、親睦演芸会と一泊バス旅行のみ実施。

平成十二年度（二〇〇〇）、総会（多目的ホールに変更）。

更。

平成十四年度（二〇〇二）、総会（四〇〇名出席）

十月二十日、発足三十五周年記念総会として「前之

浜チヨイのチヨイ踊り」一行を迎える。

○ 役職・役員名

年 代	会 長	副会長	会 計	幹 事 長	事 務 局 長
昭和四十二年 (一九六七)	重松 林	鈴木 直吉	兼任	節 栗脇	節 栗脇
	中園 慶造	栗脇 節	節 栗脇	節 栗脇	節 栗脇
	鈴木 芳清				

喜入会は第一回以来毎年十一月に開催されてきたが、平成十五年は第二十回記念大会に当たる。

○平成十五年度(第二十回記念大会) 役員

東房 國雄 (会長)	松久保泰助 (副会長)
豊倉 昭 (副会長)	鈴東 宏 (幹事長)
鈴 徹朗 (副幹事長)	西 厚夫 (会計幹事)
今吉 修一 (総務幹事)	帖地 雄治 (総務幹事)
西 邦宏 (事務局長)	志々目晃也 (事務局次長)

三 鹿兒島喜入会

本会は終戦前にも有志により開催されていたようであるが、戦後、本会の復活の声があり、平成十年(一九九八)、四〇名ぐらいが集まり、再発足の運びとなった。同年十一月、第二回を開催し、その後毎年十一月に計画的に開催され、平成十四年度は第六回に当たる。

本会には特に会則はないが、第二回の入会案内から本会の目的や構成などが推察できる。出席者の多い年は二〇〇名近くが集い盛会であった。

第二回喜入会の案内状は次のとおりである。

鹿兒島喜入会御案内

拝啓 皆々様にはご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、戦後長らく途絶えていた「鹿兒島喜入会」を本年二月に発足し約四〇名弱お集まりいただき第一回会合を盛大に行いました(席上、会長 今吉弘、幹事 隈元泰宏 春田滋 牧園次男を決定)。次回はさらにお仲間を広げて鹿兒島喜入会を盛大にとのお声があり、これに基づいて第二回目を下記の通り計画致しましたので是非皆様御参加下さい。

この喜び入る町「喜入」に縁を戴く皆様方が世代を超えて相集い、素晴らしい出会いを得て、近況を語り、美しく雄大な桜島のみえる故郷喜入を語り、先祖の事を想起し、恩師友人の事など語り又新しい出会いが生まれることも期待して皆様の参加をお待ちいたしております。今般下記の方々に御案内申し上げ御参加戴きたく思つて居りますので、お知り合いをお誘いの上是非ご参加下さい。尚、当日は喜入町長も御出席の予定です。

一 喜入町御出身の方々(喜入町内外お住まいの方々)

二 御先祖が喜入町御出身の方々

三 小、中学校等また会社等に喜入で勤務された方々

又はされている方々

四 御夫婦の片方でも喜入に御縁ある方々

立食形式の肩肘張らない会合を予定しております
(勿論休息用椅子は用意いたします)。特に女性の御参加、御夫婦の御参加、親子兄弟の御参加、友人相語らつての御参加等大歓迎です。予定は下記のとおりです。

記

日時…十一月九日(月) 午後六時〇〇分より

場所…サンロイヤルホテル

鹿児島市与次郎一―八―一〇

電話…〇九九―二五三―二〇二〇

FAX…〇九九―二五五―〇一八六

会費…男性 五〇〇〇円 女性 四〇〇〇円

○ 役員

会長 今吉 弘 幹事 春田 滋

幹事長 隈元 泰宏 // 有田 哲郎

// 牧 蘭 次男
// 浜 蘭 幸子

